

2026 年度日本大学英文学会 10 月 英語学シンポジウム

日本語から見た英語，英語から見た日本語

<趣旨>

日本大学英文学会の目的のひとつは、「英米文学・英語学・英語教育に関する学術的研究」の推進である。しかし、「英語とはどのような言語か」という根本的な問いに迫るには、対照言語学的な視点からの考察が不可欠である。なぜなら、他言語との対照を通じてしか発見することのできない言語の普遍性や個別性も存在するからである。さらに、複数の言語を比較することは、言語の背後に存在する人間の認識（世界の捉え方）の違いを解明することへもつながる。

本シンポジウムでは、英語学を専門とする研究者が母語である日本語の諸表現を取り上げ、英語の表現と比較・対照することで、日英両言語の特徴を浮き彫りにすることを目的とする。具体的には、(1) 英語の未来表現とその訳語、(2) 日本語の「られる」と英語の受動態、(3) 証拠性の「らしい」に対応する英語の表現の三点をトピックとして取り扱う。両言語の類似点や相違点、そしてそれぞれの言語の独自性を検証しながら、対照研究が直面する本質的魅力と奥深さを共有したい。

<第一発表>

英語未来表現の訳語の問題を考える

佐藤健児
(法学部准教授)

近年、国内外を問わず、英語の未来表現に関する研究の成果が相次いで報告されている。しかし、それらの研究の多くは、英語という個別言語における未来表現の意味的・統語的特徴の記述、あるいは通時的変化の解明を目的としており、英語と日本語の対照研究という観点からは十分な議論がなされていないのが現状である。学習英文法においても、大きく意味の異なる二つの未来表現に対して同一の訳語が採用されている例や、明らかに誤訳と考えられる例が散見されるなど、英語の未来表現と日本語の対応関係については、なお検討すべき課題が山積している。

このような現状を踏まえ、本発表では、教科書、学習参考書、学習英和辞典などにおける英語の未来表現に関する訳語の問題を取り上げ、個々の英語の未来表現に対する適切な日本語訳を考える。扱う未来表現は、will, be going to, 現在進行形の未来用法の三つである。具体的には、「意志未来」用法の will の訳語は「…(する)つもり」でよいか、be going to や現在進行形の未来用法の訳語は何かなどの問題を議論する。

<第二発表>

カテゴリー化から見た英語の受動と日本語の受身

－受影性と制御不能感－

町田章

(法学部教授)

日本語には英語に直訳できない受身文が存在する(町田 2018)。本研究では、これらの事例が示す日本語と英語の違いを手掛かりに、カテゴリー化の観点から言語研究の在り方について議論する。

- (1) a. 昨日は雨に降られて散々だった。(*I was rained yesterday.)
- b. 酒は飲んでも飲まれるな。(*I was drunk by the alcohol.)

一般に、英語の受動文の容認性を左右する要因としては、他動性、特に被動作主が受ける受影性 (affectedness) の高さが挙げられる。高見の「特徴づけ」も受影性の一つと考えるならば、動作主の引き起こした事態によって被動作主が受ける影響が大きいほど、その受動文の容認性は高くなるのである (Bolinger 1975, Rice 1987, 高見 1995)。そしてこれらの研究に呼応するように、日本語の受身文についても、受影性の観点から研究がなされてきた (谷口 2005, 田中 2019)。

しかしながら、英語の受動文に受影性が関係するのは、受動形態素 (-en) が事態の最終局面である「完了」や「結果」に焦点を当てる機能を有するためであるが、日本語の受身文には、そのような説明は当てはまらない。日本語のラレル形式が表す「受身」は、「自発」「可能」「尊敬」と同一のカテゴリーを形成しており、「完了」や「結果」とは関連をもたないからである。

本研究では、日本語の受身表現は、英語との類推に基づいて受影性の観点から説明するこ

とは不可能であり、言語ごとに異なるカテゴリー体系を考慮してはじめて説明が可能になることを主張する。

<第三発表>

日英語における事態把握と情報構造

－証拠性標識「らしい」をめぐって－

黒滝真理子
(法学部教授)

英語の“The baby is hungry.”や“My daughter has a headache.”を日本語へ翻訳する際、「赤ちゃんはお腹がすいているらしい」や「娘は頭が痛いようだ」のように、証拠性(evidentiality)を表す標識などを付与するのが自然である。日英語の対照分析を行うと、日本語の証拠性表現が英語では明確に訳出されず、無標化される事例が散見される。

言語類型論的観点からは、推量に軸足を置く言語と証拠性に軸足を置く言語が存在するとされる。日本語は後者に位置づけられ、その背景には、従来、他者感情に対する人称制限や、事態を状況全体として捉える「主観的把握」「自己のゼロ化」(池上 2000)といった話し手の認知構造があると指摘されてきた。しかしながら、証拠性は話し手の視座にとどまらず、聞き手に対して「情報の信頼性を判断する根拠」(Aikhenvald 2004)を提示するという相互行為的な機能も併せ持つ。したがって、従来の事態把握の観点のみならず、話し手と聞き手間の「情報構造(情報の共有・非共有)」の観点からも証拠性を捉え直す必要がある。

そこで本研究では、証拠性と推量を兼ね備えた「らしい」に着目し、日英語対訳コーパスの実例分析を通じて、英語における証拠性表現の選択や無標化が生じるメカニズムを明らかにする。